

令和 6 年 2 月 22 日

教 育 長 様

研究コース	
B グループ研究B	
校園コード（代表者校園の市費コード）	
561155	
選定番号	209

代表者 校園名： 大阪市立本田小学校
 校園長名： 今村 友美
 電 話： 06-6581-1531
 事務職員名： 喜連 尋滋
 申請者 校園名： 大阪市立本田小学校
 職名・名前： 主務教諭 池上 智希
 電 話： 06-6581-1531

令和5年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和5年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	B グループ研究B	研究年数	新規研究（1年目）
2	研究テーマ	令和の日本型学校教育の創造 -国語科における学習の個性化を探る-			
3	研究目的	<p>令和3年1月に中央教育審議会から、「令和の日本型教育」についての答申が行われた。そこでは個別最適な学びと協働的な学びの往還について、その必要性が述べられている。しかし、具体的な授業デザインや児童の姿などが捉えにくいことが課題ではないかと考える。そこで本取組では、個別最適な学びの柱である「学習の個性化」に焦点を当て、国語科における学習の個性化を明らかにすべく研究を進めていく。以下具体的に研究の目的を記す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○国語科で育む資質・能力を明確化し、系統性を意識した単元や授業作りの方法を整理する。 ○知識・技能等を土台とし、児童それぞれが選択・判断できるような授業デザインを目指す。 ○教科等横断的な視点から、国語科と他教科の関連を探る。 ○先進的研究校や有識者から学ぶ場を企画し、それらを全市へ発信することで学びを広げる。 <p>これらの取組を通して、児童の資質・能力の育成を目指す。</p>			
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。（MSゴシック 9.5pt イント）</p> <p>○国語科で育む資質・能力を明確化し、系統性を意識した単元や授業作りの方法を整理する。 ・月に1回程度、研究メンバーでの会議を開き、教材分析・授業像の共有及び指導案の作成等を行った。（6月24日・7月8日・8月9日・9月9日・10月28日・11月11日・12月16日・1月14日など） ・「個別最適な学び」「学習の個性化」について知見を広げるため、2週間に1回程度、読書会を実施した。使用した文献：「これからの中の時代に求められる資質・能力とは」「教師の自立性と教育方法」（ともにがんばる先生での消耗品費で購入）など。 ○知識・技能等を土台とし、児童それぞれが選択・判断できるような授業デザインを目指す。 ・公開教材分析会実施（12月2日）し、1月に実施する教材について提案内容を報告した。参加者とグループ協議を行い、選択・判断できる授業デザインについて話し合った。また、明星大学白石範孝教授を招聘し、講演会から国語科の授業づくりについて学んだ。 ・公開授業研究会（1月25日）では、3年生物語文「ワニのおじいさんのたから物」5年生説明文「『弱いロボット』だからできること」の2つの提案授業を実施した。どちらの授業でも単元内に【読みの土台作り】（知識・技能等）→【個別での探究】（問い合わせの選択・判断）→【協働での解決】という流れを計画し、個の学びと協働の学びの場をデザインした。明星大白石教授を招聘し、授業の振り返り及び講演会を実施した。 ○教科等横断的な視点から、国語科と他教科の関連を探る。 5年生総合的な学習の時間と国語科「環境問題について報告しよう」の単元間の関連を図り、総合での学びを書くことで表現することができるようとした。また「『弱いロボット』だからできること」と社会科「情報社会に生きるわたしたち」を関連させ、国語科の教材文を読み深める手立てとした。 ○先進的研究校や有識者から学ぶ場を企画し、それらを全市へ発信することで学びを広げる。 ・全国国語授業研究大会（8月）、国語教育全国大会（8月）、筑波大附属小学校研究発表会（2月）、福岡大附属福岡小学校研究発表会（2月）などに参加し、国語科教育や「個別最適な学び」について学んだ。参加後は、本研究メンバーへの伝達講習を実施した。8月に学んだことは、12月の教材分析会・1月の公開授業研究会の授業デザインに生かすことで全市へ発信した。2月に学んだことは、研究の検証や次年度への課題整理に活用するとともに、それぞれの所属校へも学びを共有した。</p>			
研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。					

5	研究発表等 の日程・ 場所・ 参加者数	日程	令和 6 年 1 月 25 日	参加者数	約 85 名
		場所	大阪市立本田小学校		
		備考	令和5年12月2日 公開教材分析会 場所：大阪市立堀川小学校 参加者数30名		

大阪市教育振興基本計画に示されている、子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上および教員の資質や指導力の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。

【見込まれる成果1】

- 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上
- 教員の資質や指導力の向上

既習事項や学習用語を土台（知識・技能）とし、児童が学びの方向性を選択したり判断したりしながら、国語科の学習を進める姿が見られる。

《検証方法》

抽出単元の実践後に児童アンケートを実施し、「課題解決に向けて自分で工夫して取り組んだ」「どうすれば課題が解決するかを考えた」の項目に対し、肯定的な割合を80%以上とする。

〔検証結果と考察〕

抽出単元の実践後に児童アンケートを実施し、「課題解決に向けて自分で工夫して取り組んだ」「どうすれば課題が解決するかを考えた」の項目に対し、肯定的な回答が93%であった。また児童の振り返りからは、「一つのことに対するいろいろな視点で見ることで考えを深めることができた。」「具体や抽象、主張などを考えて読んでいくことが大切だと分かった」「一つ一つの言葉にどんな意味がこめられているかを考えることで分かることがある」といった記述が見られた。児童自身が着眼する言葉や学び方を選択しながら、課題解決に向かっていたことが分かった。次年度も実践量を増やし、児童がより自分で選択・判断（失敗）を繰り返しながら課題解決へ向かえるようにしたい。

【見込まれる成果2】

- 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上
- 教員の資質や指導力の向上

児童の興味・関心に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、国語科における児童の資質・能力が育成される。

《検証方法》

経年調査において、国語科の「基礎・活用」に関する項目で大阪市平均を超える。児童アンケートを実施し、「国語科において自分には力がついた」に肯定的に回答する児童を80%以上にする。

〔検証結果と考察〕

経年調査において国語科の平均正答率は大阪市平均69.7に対し、対象クラスは70.7であった。（基礎は大阪市平均74.3に対し、対象クラスは73.5、活用は大阪市平均59.6に対し、対象クラスは64.5であった。）校内での児童アンケートにおいて「国語科において自分には力がついた」に肯定的に回答する児童は93%であった。また経年調査における「国語の授業はよく分かりますか」に肯定的に回答する児童は87%であった。これらのことから、国語科における資質・能力が育成されつつあることが数値からもまた児童自身も感じていることが分かる。一方「基礎」の部分では大阪市平均をやや下回っている。誤答を分析すると、他の項目と比べ、漢字の問題に対して無回答がやや多いことが分かった。次年度は「読むこと」に関連付けて、学びの文脈の中で漢字を活用できるような取り組みが必要であると感じた。

【見込まれる成果3】

- 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上
- 教員の資質や指導力の向上

本研究を進める中で、「学習の個性化」についての知識を深め、具体的な授業デザインをイメージすることができる。またそれらを指導案等で言語化し、実践・省察を繰り返すことで国語科の授業改善を図る。

《検証方法》

教員アンケートの項目「国語科における『学習の個性化』について、実践のイメージができた」において肯定的な回答を80%以上とする。またインタビュー調査を実施し、イメージの具体的な内容を分析する。

〔検証結果と考察〕

1月に実施した研究メンバーへのアンケート調査では、「国語科における『学習の個性化』について実践のイメージができた」という項目に対して肯定的な回答が100%であった。またその具体的な内容についてインタビュー調査を行った結果、次のような回答があった。

- ・子どもが自分自身が追求したい問い合わせをもっているまたは選択・判断できるということ
 - ・子どもがその問い合わせの方向性や内容が間違っていても良いと思えること
 - ・子どもたちの学びが共通のテーマに向かっていること
- また、学習の個性化を支える学習環境のデザインとして
- ・個別に追求する時間を数時間確保すること。またその学びを子ども自身が修正できたり、失敗しても許容されたりする環境が大切であること。
 - ・個別に追求する前には、共通の読みの土台を作る時間を確保し、子どもたちが解決に向けて見通しをもつことができるようになること。
- が大切であることが挙げられた。これらのことから、本研究メンバーは国語科における学習の個性化について具体的なイメージをもつことができているということが分かる。

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果4】</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上 <p>公開授業研究会を開催し、提案授業及び研究協議会、講演会を通して、参会者と共に「学習の個性化」について学びを深めることができる。</p> <p>『検証方法』</p> <p>公開時のアンケートで「本校の研究は、参考になったか」の項目で肯定的な割合を80%以上、「学んだことは、自身の実践にも生かせそうだ」の項目で肯定的な割合を80%以上にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>2024年1月25日に行われた公開授業研究会のアンケートにおいて、「本日の研究会で、自分の知識を深めたり、新たな発見があったりしましたか。（質問項目を検討した後、左記のように変更）」の肯定的な回答は100%、「学んだことは、自身の実践にも生かせそうだ。」の肯定的な回答は100%であった。自由記述欄において「子どもが主体的に学習できる環境が整っていた。」「子どもたち主体で進むとても良い実践だった。」「教師主体ではない素晴らしい授業であった。」といった記述が見られた。その要因として国語科の単元内に「探究」の時間を取り入れた実践を提案したことや、講師として招聘した明星大学白石範孝教授の国語授業づくりの講演会が好評だったことがあげられる。次年度も同様の公開授業研究会を実施する予定である。</p>

	<p>【研究全体を通した成果と課題】 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>研究テーマである「国語科における学習の個性化」の定義について本研究では、現在「知識・技能等の読みの土台をもとに、そこから生まれた児童の問い合わせや探究したい内容を選択・判断できる授業デザイン」であると考えている。そのためには授業を単元で考えることが大切である。単元の前半では協働で読みの土台を作り、それを足場とすることで児童それぞれが探究したい問い合わせなどが生まれることが分かった。またその問い合わせに合わせて振り返りを行うことで、授業者は児童一人一人がどの言葉にこだわって学習を進めているかを見取ることができる。この「見取り」を大切にすることで、子どもをほいたらかしにするのではなく「学び」として成立する「個性化」の時間を確保することができるのだと考える。さらに単元を通じた共通のテーマも必要であると考える。この共通のテーマも「読みの土台」として、児童と共有することで、個性化された時間も目的意識をもって読み進めることができる。単元の終末にはテーマに対して学級全体で解決する場を設定することにより、一人一人のこれまでの学びが生かされ、協働的に学ぶ場になるのだと感じた。このように「国語科における学習の個性化」の一端が見えたことは本年度の大きな成果であると考える。一方課題として残ることは、大きく2つある。1つ目は評価である。個々の学びを「見取る」ことは必要であるが、それらをどのような基準でどのように評価するかはまだ曖昧である。2つ目は実践量である。上述した考えは、1月に公開した教材以外でも実践可能かどうかを検証するとともに、その考え方や定義も深化させなければいけないと考える。次年度はこの2つの点を明らかにすることを中心に研究を進めたい。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>《代表校園長の総評》</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p>
--	--

「国語科における学習の個性化」をテーマに掲げた本研究では、国語科の知識・技能等を土台として、児童の興味・関心に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することを目指した。研究メンバーで定期的に教材分析・指導案検討・読書会等を実施し、1月の公開授業研究会では、知識・技能等の読みの土台作りから、問い合わせの選択・判断をする個別での探究、そして協働での解決という流れで単元を構成した授業を提案することができた。参加者の意見からも、児童一人一人が主体となって読みを深めることができたと考える。

本研究では、1月の公開授業研究会だけでなく、12月に参加者を募って、明星大学の白石教授を講師に、教材分析研究会も実施している。「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）で、実現すべき姿として掲げられている個別最適な学びの「学習の個性化」について、本研究グループだけでなく、多くの方と一緒に学ぶ機会を持てたことは大阪市にとっても非常に価値のあることであり、次年度以降も本研究が継続していくことを希望する。

2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する

3. 継続研究（3年目）